

鷗外とエリーゼ

小説「舞姫」はフィクションであるが、実は、鷗外がドイツ留学から帰国した際、鷗外の後を追ってエリーゼというドイツ人女性が来日しているのである。彼女は鷗外にとつてどのような存在だったのか。いくつかの文献を引用するのが想像してみてもよい。

鷗外が四十五歳の時に発表した日露戦争従軍詩歌集に『うた日記』があるが、この中に、二十年前のドイツ留学時代のことに触れた「扣鈕」という詩がある。

南山の たたかひの日に

(南山||日露戦争時の激戦地)

袖口の こがねのぼたん

ひとつおとしつ

その扣鈕惜し

べるりんの 都大路の

ばつさあしゅ 電燈あをき

店にて買ひぬ

はたとせまへに

えほれつと かがやきし友

(えほれつと||肩章)

こがね髪 ゆらぎし少女

はや老いにけん

死にもやしけん

はたとせの 身のうきしづみ
よろこびも かなしびも知る
袖のぼたんよ

(はたとせ||二十年(留学時から))

かたはとなりぬ

ますらをの 玉と砕けし

ももちたり それも惜しけれど

(ももちたり||百人)

こも惜し扣鈕

身に添ふ扣鈕

ここで鷗外は従軍中(鷗外は第二軍軍医部長であった)になくしたカフスボタンのことを惜しみつつ、それを買い求めた遠い二十年前のドイツ留学時代のことに思いをはせている。

この詩を引用して、鷗外の長男である森於菟はこう書く。

「この『こがね髪ゆらぎし少女』が『舞姫』のエリスで父にとっては永遠の恋人ではなかったかと思う。エリスは太田豊太郎との間に子を儲け仲を裂かれて気が狂ったのであるが、父にもその青年士官としての独逸留学時代にある期間親しくした婦人があった。私が幼時祖母から聞いた所によるとその婦人が父の帰朝後間もなく後を慕って横浜まで来た。これはその当時貧しい一家を興すすべての望みを父にかけていた祖父、そして折角役について昇進の階を上り初めようとする父に対しての上司の御覚えばかりを気にしていた老人等には非常な事件であった。(中略)『歌日記』の出たあとで父は当時中学生の私に「このぼたんは昔伯林で買ったのだが戦争の時片方なくしてしまいました。とっておけ」といってそのかたわの扣鈕をくれた。」(父親としての森鷗外)

ここで於菟のいう祖母とは、鷗外の母・峰子のことである。

実は森家では、鷗外の留学前から同郷の恩人でありかつ元老院議員である西周の媒酌で、海軍中将・赤松則良男爵の長女・登志子との縁談話が勧められていたのである。森家の家運をかけた縁談だった。それだけに、エリーゼの来日はまさに青天の霹靂であつたらう。

従来、このエリーゼの来日は、彼女が一方的に鷗外を追ってきたかのように解釈されることが多かったが、最近の研究では、鷗外が彼女を呼んだという説の方が有力になってきている。

たとえば、ドイツから日本に向かう際、コロンボの港に先に入港した鷗外は、後から来るエリーゼのために本を残している。

その本の扉には、エリーゼに向けた鷗外のメッセージが手書きのドイツ語でこう書かれている。

「この小説は航海の最後に、他に何も読むものがなくなったときに読みなさい。どちつかとうと読まないほうがいい。この小説は読む価値がない。」
コロンボ
1888. 8. 16 M」

もしエリーゼが一方的に追ってきたのなら、このような形で本を託すというのは不自然であろう。

また今野勉氏は、著作の中で、「鷗外は每晚必死に家族を説得していた。(中略) エリーゼを受け入れること、赤松家との縁談を断ること、鷗外は、まず、家族の反対を抑えこんでその先へ進もつとしていた。」と推測した上で、次のような新事実を明らかにしている。

「鷗外の強い説得が効を奏して、家族もいつとき折れて、鷗外の希望を受け入

れかかっていたことを示す記録がある。

『西周日記』九月十七日。縁談の返辞を催促してから一週間のち、森家の清子(鷗外の祖母)がやってきた。

「森は、来り、婚姻之返納を述べ」(中略)

「返納」とは、いったん預かったものを、元のところへ返すことをいう。

私は、国会図書館で、原文を確かめたが、確かに「返辞」ではない。

つまり、森家は、いったん預かった縁談の話を、鷗外の懸命の説得に折れて、西家へ返したのである。

縁談の話はいったんお返しさせてください、という森家の意思表示である。縁談は事実上ストップしたのだ。

返納の理由は告げられていない。憮然とし不快でもあつたらう西は、この日(九月十七日)から十月二十日までの一ヶ月以上にわたって、森家について一切の記述をしていない。どちらからの訪問も書簡のやりとりもなくなった、ということである。(『鷗外の恋人』)

だが、それでも最終的には母・峰子を初めとする家族総がかりでの説得の前に力尽きたのか、エリーゼは帰国させられ、鷗外はこの縁談を受け入れている。まだ個人は個人ではなく、「家」や「軍」という共同体の一部でしかなく、その拘束からは逃れられない時代でもあつた。(日本で初の正式な国際結婚と言われる青山光子の婚姻は、その4年後の明治25年の出来事である。)

鷗外の次女・小堀杏奴はこう書く。

「父は極端な親孝行で、母親の命令には絶対服従であつた。これは確かに父の美しい性格を証拠つけるものであつたが、絶対となると其処(そこ)に無理が生じるのも止むを得ない。」(『晩年の父』)

また、前述の森於菟はこう書く。

「前後から察するに父はただ投げやりに両親の意に任せたように見える。」「父親としての森鷗外」

しかし、このような結婚生活がうまくいくはずもなく、長男・於菟が生まれるにもかかわらず、鷗外はわずか一年で離婚している。

「父もこの間に苦しんで非常に痩せ、大事な父を病人にしてまでこの結婚生活をづけさせる考えも祖母になかったというのを私は祖母からきいた事がある」

「私はまたある時祖母が私にいうのを聞いた。『あの時私達は気強く女を帰らせお前の母を娶めとらせたが父の気に入らず離縁になった。お前を母のない子にした責任は私達にある』と。」「森於菟『父親としての森鷗外』」

「舞姫」はこうした渦中で書かれた作品である。

太田豊太郎は、自分自身の弱さゆえにエリスを捨てていく存在として描かれている。これはエリーゼとの約束を果たせなかった鷗外が、誰のせいでもなくすべての責任は自分にある、という形で決着をつけたとも言える。個人が個人として自由意思で生きられる時代ではなかったのだが、敢えて鷗外は言い訳がましいことは書かなかったのである。

そういう時代を生きてきたから故なのか、鷗外は遺書において、

「死は一切を打ち切る重大事件なり。いかなる官憲威力といえども、これに反抗する事を得ずと信ず」

と、前置きをした上で、

「余は石見人、森林太郎として死せんと欲す（「石見」は鷗外の生まれ故郷

である津和野がある島根県西部を指す）宮内省陸軍皆縁故あれども生死別るる瞬間あらゆる外形的取扱いを辭す森林太郎として死せんとす」

「墓は森林太郎墓の外一字もほるべからず」

「宮内省陸軍の榮典は絶対に取りやめ請ふ」

として、生前のあらゆるしがらみ・榮譽・称号を一切拒否して死ぬことを望んでいる。

だから三鷹にある彼の墓には「森林太郎墓」とだけしか彫られていない。

さて、鷗外はエリーゼに関しては何一つ記録を残していない。

前述の小堀杏奴はこう書いている。

「亡父が、ドイツ独逸留學生時代の恋人を、生涯、どうしても忘れ去ることの出来なほど、深く、愛していたという事実^{トイ}に心付いたのは、私が二十歳を過ぎた頃であった。そう考えるようになった原因の一つは、死期の迫った一日、父が、母に命じて、独逸時代の恋人の写真や、手紙類を持って来させ、眼前で焼却させた、母が語ってくれたからである。」「『晩年の父』」

ただ、鷗外の死後、遺品の中に、一枚のモノグラム（刺繍用の金属の型）が遺されていた。

このモノグラムについて、森於菟はこう説明する。



「森林太郎の頭文字、すなわちMRを組合せた種々の形を刷り出すための錫板^{すずいた}。父が独逸在留時代にくらせたものらしい。（中略）このモノグラムはエリスの形見と思われる」（『父親としての森鷗外』）

また、鷗外の妹・小金井喜美子はこう書き残している。

「後、兄の部屋の棚の上には、緑の繻子しゅうすで作った立派なハンケチ入れに、MとRとのモノグラムを金線で鮮かに縫取りぬいとりしたのが置いてありました。それを見た時、噂にのみ聞いて一目も見ひとめなかった、人のよいエリスの面影が私の目に浮びました」『鷗外の思ひ出』

このモノグラムについては、六草いちか氏が、著作で詳しく説明している。

「鷗外の遺品のひとつにモノグラム型金がある。モノグラムとはイニシャルの二文字を絡めたデザインのこと、鷗外の遺した型にはRとMの二文字が象かたちられている。いうまでもなく「Rintaro Mori」のRとMである。

今日では、モノグラムは系譜を調べる者たちの調査手段としてしか注目されなくなってしまうが、一九三〇年代頃までは、花嫁が婚礼の際に新郎の身の回りや家庭の布製品にイニシャルを施すことは、ドイツの一般家庭における伝統だった。(中略)

鷗外が遺したモノグラム型は、それらの刺繍を刺すために使う型金で、まさに、『嫁入り支度用テンプレート』と呼ばれていたのである。『鷗外の恋舞姫エリスの真実』

つまり、このモノグラムはエリーゼの嫁入り道具になるはずだったのだ。

ドイツの習慣を知らないものから見れば意味のわからない金属の板であるが、これは結ばれるはずだった二人の愛の証だったのである。だからこそ鷗外は最期まで処分できなかったのかもしれない。

ところで、六草いちか氏は、前著の中で初めてエリーゼの実名と履歴を明らかにした画期的な研究成果を発表しているのだが、その中で鷗外の子供たちの名前についての考察が興味深い。

「エリーゼの実像に近づいた今、別れてもなお断ち切ることが出来なかった鷗外のエリーゼへの思いを、たとえば子どもたちの名においても窺い知ることができる。

先にも述べたが、於菟は『森鷗外』(養徳社、一九四六年)に兄弟姉妹の名はすべてドイツ語に由来すると書き、「於菟(おと)Otto」、「葉荊(まり)Marie」、「杏奴(あんぬ)Ane」、「不律(フリッツ)Fritz」、「類(るい)Louis」とそのスペルを添えている。

また同書によると、「杏奴(あんぬ)」の名は、呼びにくいと鷗外の妻しげが反対したにもかかわらず、かねてから付けたい名だったと鷗外が譲らず、最後に妻に隠れて区役所に届けを出してしまったというから、この名への思い入れのほどが窺える。

「葉荊(まり)Marie」がエリーゼのフルネーム「Elise Marie Caroline Wiegert エリーゼ・マリー・カロリーネ・ヴィーゲルト」の二つ目から名づけられたのなら、「杏奴(あんぬ)Ane」はエリーゼの妹「アンナAnna」からの命名ではないだろうか。

あるいは、エリーゼへの思い出は内に秘め、「葉荊(まり)Marie」をエリーゼの母親「マリー Marie」から採ったのなら、「杏奴(あんぬ)Ane」はそれぞれスペルが一致する祖母の名「アンネ Ane」からだろう。いずれにしてもエリーゼの面影を強く感じる。